学位論文要約

# 社会活動を行う犯罪被害者遺族のレジリエンスと意味づけに関する研究

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻　心理学分野

D163065　太田美里

# 目次

**第 1 章　本研究の背景と目的**

第 1 節　犯罪被害者遺族に着目する意義

第 2 節　レジリエンス研究の動向と問題点

第 3 節　意味づけへの着目

第 4 節　社会活動を行う遺族への着目

第 5 節　本研究の目的

**第 2 章　心的外傷後成長(PTG)に対するレジリエンスの個人要因と環境要因の関連(研究 1)**

**第 3 章　社会活動を行う犯罪被害者遺族のレジリエンスの検討**

第 1 節　意味づけを主軸とした犯罪被害者遺族の回復プロセス (研究 2-1)

第 2 節　活動を終えようとする犯罪被害者遺族の心的変容プロセス (研究 2-2)

**第 4 章　総合考察**

第 1 節　本研究の成果

第 2 節　本研究の限界および今後の課題

# 第 1 章　本研究の背景と目的

## 第 1 節 犯罪被害者遺族に着目する意義

犯罪被害者遺族 (以下, 遺族) は,心的外傷後ストレス障害 (Post Traumatic Stress Disorder 以下, PTSD) 等の精神疾患に罹患するリスクが高く(Kristensen, Weisæth, & Heir, 2012), 遺族に対する心的援助の質を向上させることは重要な課題である。しかし, 遺族の臨床心理学的研究は, PTSD 等, ネガティブな側面に着目した研究が多く, また, 特に本邦において遺族に対する臨床心理学的研究の数は乏しい(白井, 2008)のが現状である。

## 第 2 節 レジリエンス研究の動向と問題点

そこで本研究は, 我が国の遺族を対象に, 人間の「回復」を示すレジリエンス(resilience)を検討する。レジリエンスは, 重篤なストレスにおける適応を促進する個人内外の資源に着目した概念である(Pangallo, Zibarras, Lewis, & Flaxman, 2015)が, その定義に統一した見解は得られていない。具体的には, 回復特性とする立場(Wagnild & Young, 1993), 回復プロセスと捉える立場(Luthar, Cicchetti, & Becker, 2000), その双方と結果を含めた概念と指摘する立場が存在する(石原・中丸, 2007) 。

### (1) 特性としてのレジリエンス

レジリエンスを特性と捉えた研究は, 回復を促進する多様な個人特性を明らかにしており, 本邦において多く検討されている。例えば平野(2010)は, 個人特性を生得的な性質の強い「資質的レジリエンス要因」と, 後天的に身に付け易い「獲得的レジリエンス要因」に分類し,「二次元レジリエンス要因尺度(BRS)」を作成した。こうした研究によって検討されている特性は, 適応感

等の精神的健康と正の関連が示されている(e.g., 平野, 2012)。

### (2) プロセスとしてのレジリエンス

一方，レジリエンスをプロセスと捉える研究は，1)個人の特性，対処方略(以下，個人要因)と，2) 家族，友人等のサポート (以下，環境要因) といった，個人内外の保護的因子とリスク因子の相互作用を検討してきた(Garmezy, 1991; 土岐, 2016)。こうした立場に立つ研究は，回復の多様性や，逆境の性質により個人要因の機能が異なるといった回復の文脈性を明らかにした。

### (3) 遺族を検討する上での本邦のレジリエンス研究の課題

本研究では，遺族のレジリエンスを多角的に検討するため，その定義を「ストレッサーに暴露されても心理的な健康状態を維持する力，あるいは一時的に不適応状態に陥ったとしても，それを乗り越え健康な状態へと回復していく力やプロセス」 (齊藤・岡安, 2011, p. 35) とした。先述の通り，本邦のレジリエンス研究は，個人特性と精神的健康の関連を検討したものが多い。例えば，資質的レジリエンス要因は，不適応のリスクとなる心理的敏感さが高くとも適応感の低下を緩和するが，獲得的レジリエンス要因は同様の効果を示さなかった(平野, 2012)。これは，資質的な特性の重要性を示唆しているが，資質的な特性の低い人の存在を考慮すると，個人要因の影響性を統制しても，環境要因が回復を促す可能性を検討することが重要と考えられる。

また，遺族を対象とした研究では，中島・白井・真木・石井・永岑・辰野・小西(2009)が PTSD 等の精神疾患を有する群と有さない群を比較し，前者は個人要因や環境要因が乏しいことを示した。しかし，具体的に個人と環境がどのように作用して回復が

促進されるのかは明らかになっていない。

さらに，外傷体験のレジリエンス研究では，PTSD 等の精神疾患の程度を回復の指標に用いてきた(Bonanno & Diminich, 2013)が，疾患の程度だけで遺族の心的様相を理解することは困難である。そこで本研究では，外傷体験のレジリエンスに必要な心的機能の一つである「意味づけ」(Harvey, 1996)に焦点化してレジリエンスを検討することで，遺族の心的様相を詳細に捉える。

### 第 3 節　意味づけへの着目

意味づけは,「意味づけの過程」と「生成された意味」で構成される。意味づけの過程は，生成された意味に至るまでの認知的対処(Park, 2010)を示し，自身の物事の考え方に一致するよう個人が体験を理解する「同化」や，体験を理解する際，個人が意図的に考えを修正する「調節」がある (堀田・杉江, 2013a)。一方，生成された意味は，意味づけの過程を経て生じた理解を，個人の信念に統合することであり(Bower, Kemeny, Taylor, & Fahey, 1998)，危機に直面した結果生じる，ポジティブな心理的変容を示す「心的外傷後成長(Posttraumatic Growth 以下，PTG)」 (Tedeschi & Calhoun, 2004) がある。PTG は，レジリエンスの結果の一つである(Lepore & Revenson, 2006)。本研究では Park (2010) を参考に，意味づけの定義を「個人の信念と外傷体験の評価の差を減らすための認知的対処と，それを経た結果生じた理解を，個人の信念に統合していくプロセス」とする。

### 第 4 節　社会活動を行う遺族への着目

Herman (1992/1996)は，外傷体験者の回復プロセスを 3 段階で捉え，3 段階目の再結合に至った人の中に社会活動を行う者がい

ると指摘した。本研究は活動を行う遺族はある程度回復を成しえていると考え，被害に関する社会活動を行う遺族を対象とする。

### 第 5 節　本研究の目的

本邦のレジリエンス研究の課題は 3 つある。第 1 は環境要因の影響力や機能を検討した研究が乏しいこと，第 2 は個人と環境の具体的な相互作用が明らかになっていないこと，第 3 は回復における個人の心的様相を詳細に捉えられていないことである。

そこで研究 1 では，第 1 と第 3 の研究課題を踏まえ，先行研究から「レジリエンスにおける PTG 生成モデル」を作成し，PTG に対する環境要因の影響力や機能を検討することを目的とし，次の 2 点を明らかにする。第 1 は，PTG に対し個人要因の影響性を統制しても，環境要因が影響を及ぼすのか，第 2 は，環境要因と個人要因，認知的対処，および PTG にどのような関連があるのかを検討する。そして，研究 2 では第 2 と第 3 の研究課題を踏まえ，研究 2-1 で，社会活動を行う遺族を対象に，レジリエンスの個人と環境の相互作用から成る回復プロセスについて，意味づけを主軸とした分析を行う。研究 2-2 では，研究 2-1 の対象者に縦断的な面接調査を行い，活動を終えようとする遺族の心的変容プロセスを分析し，遺族のレジリエンスを詳細に捉える。

## 第 2 章　心的外傷後成長 (PTG) に対するレジリエンスの個人要因と環境要因の関連(研究 1)

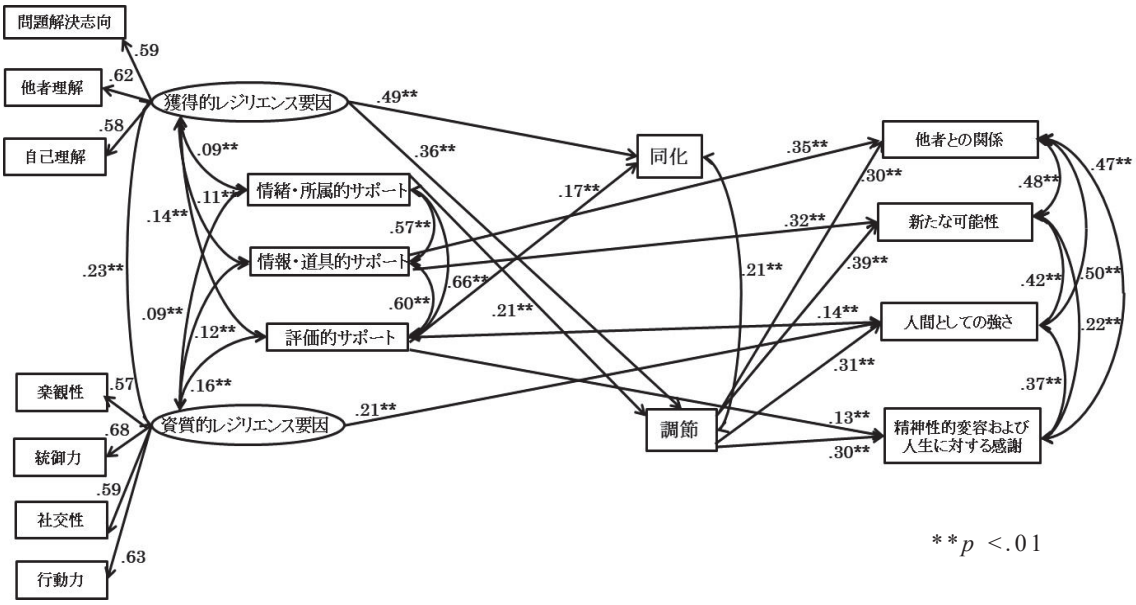
**目的**　先行研究(堀田・杉江, 2013b; Hogan & Schmidt, 2002; Lepore & Revenson, 2006)を参照し，作成した「レジリエンスにおける PTG 生成モデル」を基に，レジリエンスの環境要因の機能を明確

にする。つまり，①PTGに対する個人要因(資質的レジリエンス要因，獲得的レジリエンス要因)の影響性を統制しても，環境要因(評価的サポート，情報・道具的サポート，情緒・所属的サポート)が影響を及ぼすのか，また，②環境要因と個人要因，認知的対処(同化，調節)，および PTG の関連を検討する。なお，遺族への質問紙のみの調査は倫理的な問題がある(大和田，2003)ため，本研究は大学生を対象に最も苦痛を感じた出来事からのレジリエンスを調査し，個人の回復の基礎的な知見を得ることを目的とした。

**方法　対象者**　大学生と大学院生に質問紙調査を実施。出来事の重要度(5 件法)が 3 以下の者を除く(堀田・杉江，2013a) 309 名(男性 116 名，女性 193 名　平均年齢 20.2 歳　*SD* = 1.75) が分析対象者。**質問項目**　1)最も苦しく，人生に影響を与えたネガティブな出来事：学業，人間関係等 6 つの選択肢のうち当てはまるものを 1 つ選択させ，時期と，出来事の重要度(5 件法)を尋ねた。2)二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) (平野，2010)：楽観性，統御力，社交性，行動力の上位概念である，資質的レンジリエンス要因と，問題解決志向，自己理解，他者理解の上位概念である獲得的レジリエンス要因の 2 つの下位尺度，21 項目。3)大学生用ソーシャルサポート尺度(片受・大貫，2014)：評価的サポート，情報・道具的サポート，情緒・所属的サポートの 3 つの下位尺度，23 項目。4)意味づけにおける同化・調節尺度(堀田・杉江，2013a)：同化と調節の 2 つの下位尺度，14 項目。5)日本語版外傷後成長尺度 (PTGI-J) (Taku, Calhoun, Tedeschi, Gil-Rivas, Kilmer, & Cann, 2007)：他者との関係，新たな可能性，人間としての強さ，精神性的変容お

よび人生に対する感謝の 4 つの下位尺度, 21 項目。

**結果**　共分散構造分析を行った。その結果, $\chi^2$値は有意だったが, 本モデルにおける各適合度指標は概ね許容できる範囲の値が得られた($\chi^2$ (88) = 219.64, $p < .01$, $CFI = .92$, $RMSEA = .07$) ため, モデルを採択した(Figure 1)。本モデルでは,「情緒・所属的サポ




注．紙面の都合上，誤差項は省略した。

**Figure 1.** レジリエンスにおける PTG 生成モデル

ート」が「調節」に影響を与え,「情報・道具的サポート」は PTG の「他者との関係」と「新たな可能性」を高め,「評価的サポート」が「同化」と PTG の「人間としての強さ」および,「精神性的変容および人生に対する感謝」を高めていた。また,「獲得的レジリエンス要因」は, 特に「調節」を介して PTG の全 4 つの因子を高め,「資質的レジリエンス要因」は直接「人間としての強さ」を高めていた。

**考察**　PTGに対し, 環境要因は個人要因の程度に関わらず影響を与える重要な要因であり, その種類によって意味づけに与える機能が異なることが示された。したがって, 環境要因の影響を考慮してレジリエンスを検討していく必要性が示唆された。

## 第 3 章　社会活動を行う犯罪被害者遺族のレジリエンスの検討

### 第 1 節　意味づけを主軸とした犯罪被害者遺族の回復プロセス (研究 2-1)

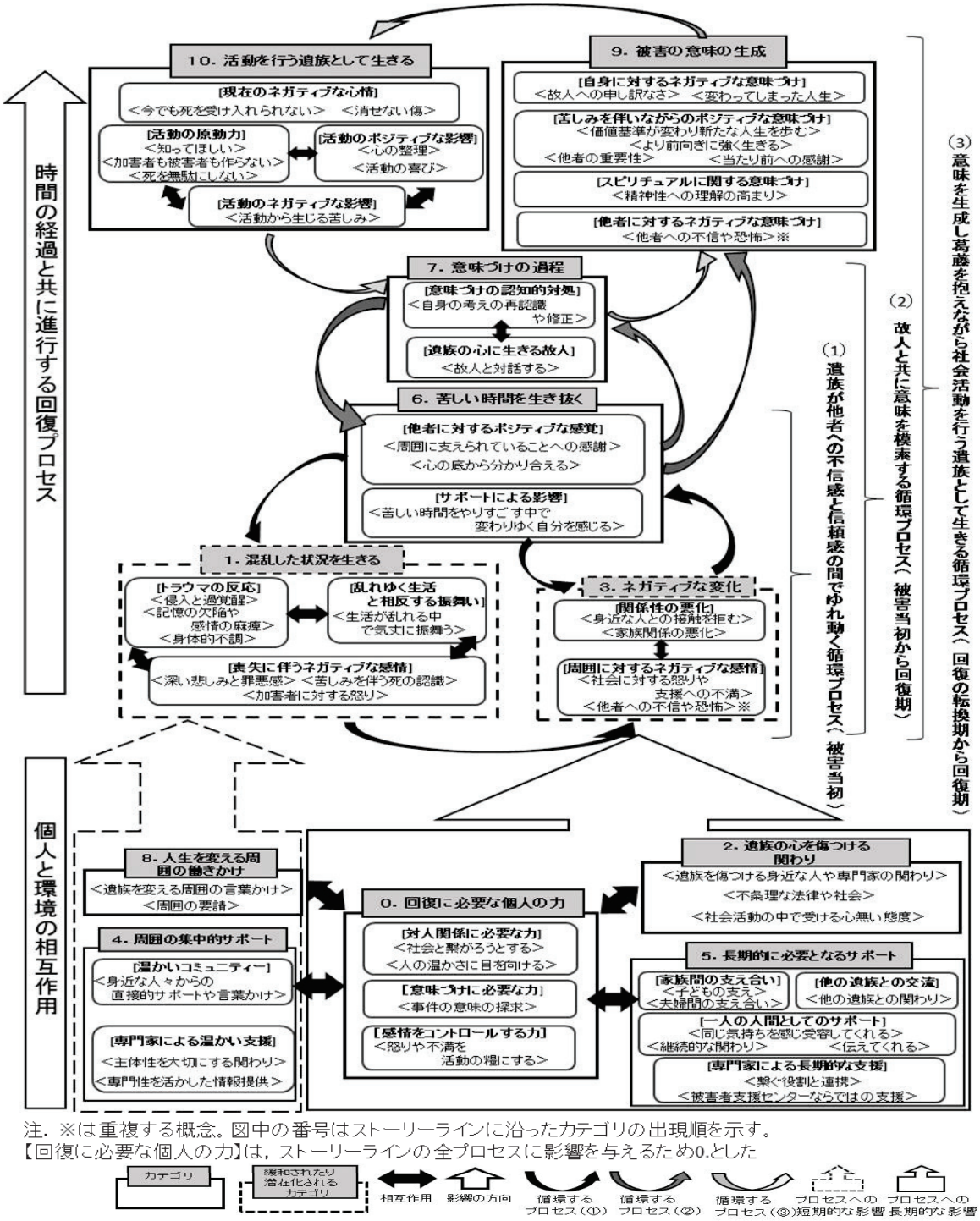
**目的**　活動を行う遺族の，レジリエンスの個人要因と環境要因から生じる意味づけを主軸とした回復プロセスを明らかにする。**方法**　**対象者**　社会活動を行っている 40 代～70 代の遺族 14 名(女性 11 名，男性 3 名)。**面接の手続き**　質問紙調査と半構造化面接を，被害者支援センター等で実施。**質問項目**:①被害の概要，②回復に役立った自身の取り組みや周囲の関わり，③被害が自身に与えた影響等。**質問紙内容**　PTSD のスクリーニング尺度である Impact of Event Scale-Revised (以下，IES-R) (Asukai, Kato, Kawamura, Kim, Yamamoto, Kishimoto, Miyake, & Nishizono-Maher, 2002) , 22 項目。**分析方法**　修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下, M-GTA) (木下, 2003) 。

**結果**　質問紙調査の結果, 14 人中 9 人の遺族が IES-R のカットオフ値以上の値を示した。また, M-GTA の分析の結果, 11 個のカテゴリが生成された。【　】と番号はカテゴリとその出現順,［ ］はサブカテゴリ，＜ ＞は概念を示す。遺族の回復は，個人要因と環境要因が相互に作用する中で，以下の 3 つの循環プロセスが重なり合うように生じた(Figure 2)。**1)遺族が他者への不信感と信頼感の間でゆれ動く循環プロセス**　遺族は家族の命を奪われ,トラウマの反応に苦しむ等,【1. 混乱した状況を生きる】。また,【2. 遺族の心を傷つける関わり】に心を傷め,【3. ネガティブな変化】を経験するが，同時に【4. 周囲の集中的サポート】と【5. 長期的に必要となるサポート】も受けた。遺族は他者への不信感と信

頼感の間でゆれ動く中，＜社会と繋がろうとする＞ことや，＜人の温かさに目を向ける＞といった【0．回復に必要な個人の力】で対人関係を維持し，サポートを受けることで【6．苦しい時間を生き抜く】。**2)故人と共に意味を模索する循環プロセス**　遺族は【6．苦しい時間を生き抜く】中で，＜事件の意味の探求＞を行った。この【0.回復に必要な個人の力】により，【7．意味づけの過程】は促進した。**3)意味を生成し葛藤を抱えながら社会活動を行う遺族として生きる循環プロセス**　遺族は【8．人生を変える周囲の働きかけ】の＜周囲の要請＞を受け，【9．被害の意味の生成】を行い，【10．活動を行う遺族として生きる】道を選択した。この際，加害者や社会への＜怒りや不満を活動の糧にする＞という【0．回復に必要な個人の力】が，活動を促進した。

**考察**　**1)遺族の個人要因**　他者への不信感と信頼感の狭間でもがく遺族にとって，＜人の温かさに目をむける＞という関係性を取捨選択する力は，サポートを享受する上で重要であることが示された。一方，こうした力により，対人関係が局限化している可能性も推察された。また，＜怒りや不満を活動の糧にする＞力は，遺族が活動を行う上で重要であるが，IES-R の得点の高さから，遺族は過覚醒の状態であることも推察された。**2)回復に必要な環境要因**　欧米の遺族は，被害当初個人でグリーフの理解を深めていく(Breen & O' Connor, 2010) が，本研究の遺族は被害当初から他者と繋がりを維持しており，対人関係の被影響性が高い可能性が推察された。**3)遺族の回復プロセス**　IES-R の得点から，活動を行っている遺族といえども高い苦しみを抱えていることが推察された。また，活動を終えることの葛藤を語る遺族

(D, L)も存在したため，縦断研究を行う必要がある。




注．※は重複する概念。図中の番号はストーリーラインに沿ったカテゴリの出現順を示す。
【回復に必要な個人の力】は，ストーリーラインの全プロセスに影響を与えるため0.とした

**Figure 2.** 犯罪被害者遺族の回復プロセス

## 第 2 節 活動を終えようとする犯罪被害者遺族の心的変容プロセス(研究 2-2)

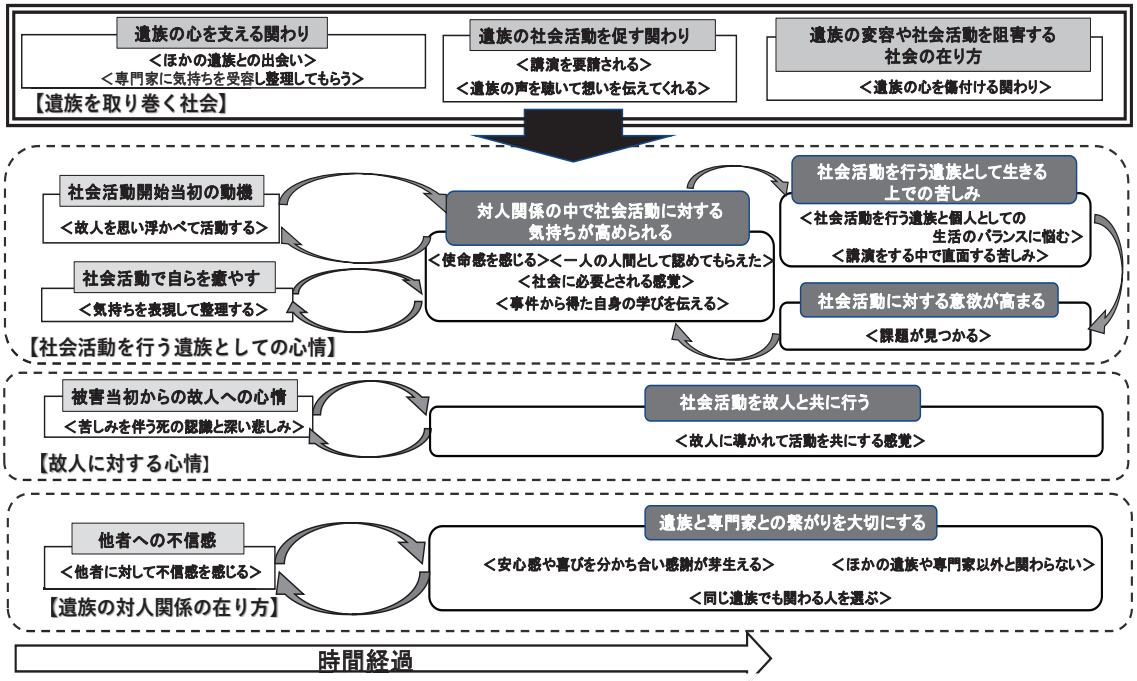
**目的** 社会活動を終えようとする遺族に縦断的な面接調査を行

い，その心的変容プロセスを明らかにする。

**方法　対象者**　遺族 10 名の内，活動を終えようとしていると語った 3 名（女性）。**面接の手続き**　半構造化面接を被害者支援センター等で実施した。**質問項目**　①社会活動を行っている自身への心情，②今後の展望等を尋ねた。**分析方法**　マッピング法（氏家・高濱，1994）を用いた。

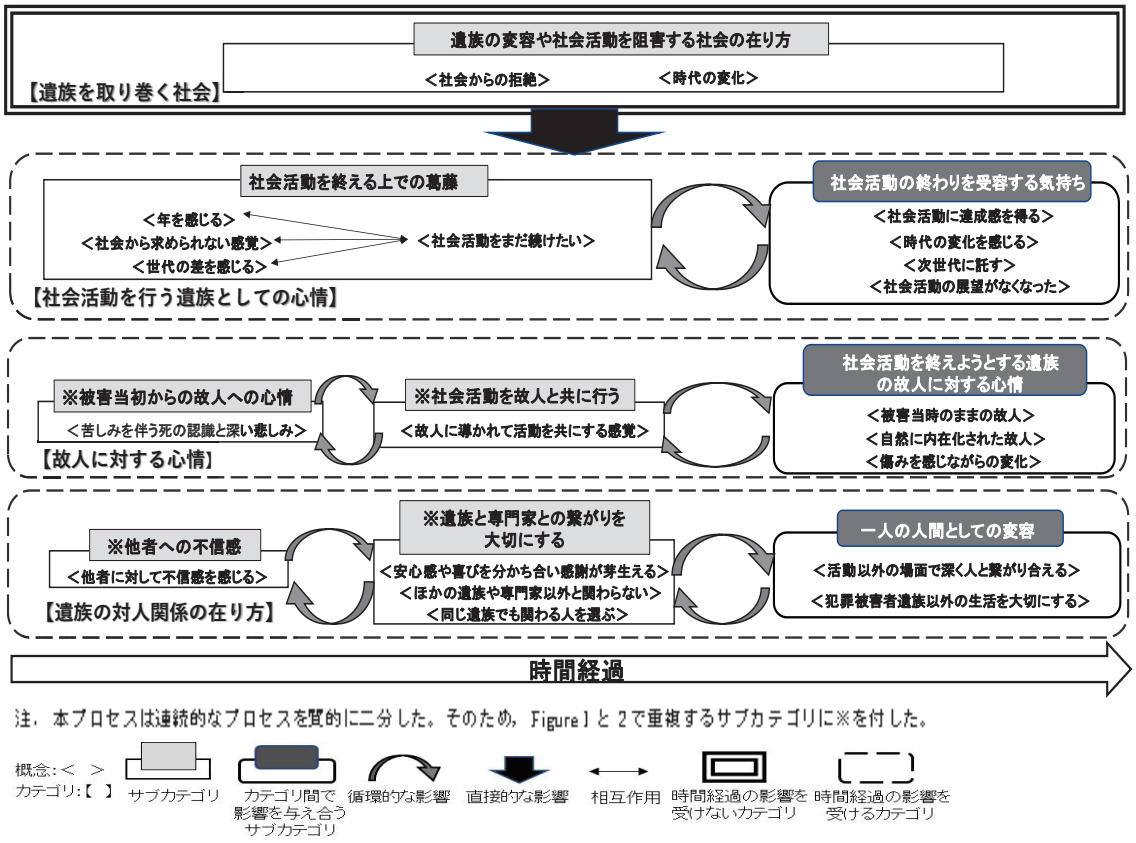
**結果**　分析の結果，4 個のカテゴリが生成された。活動の開始から活動を終えようとするまでの遺族の連続的な心的変容プロセスは，その質的差異から二分された(Figure 3, Figure 4)。**1) 故人と共に活動を行うプロセス**　遺族は【遺族を取り巻く社会】の影響により，講演対象者に故人の面影を重ねるだけでなく，社会的なレベルで活動に＜使命感を感じる＞という【社会活動を行う遺族としての心情】の変化が生じた。また，活動を行うことで＜故人に導かれて活動を共にする感覚＞が強まる等【故人に対する心情】も変化した。さらに，［他者への不信感］を抱いていた遺族が，ほかの遺族や専門家との繋がりを大切にする等【遺族の対人関係の在り方】も変容した。**2)故人と共に個人としての生活を取り戻すプロセス**　遺族は，講演を求められなくなる，体力が衰える等の影響により，活動を終えたいという気持ちが生じた。一方，生きがいがなくなる等［社会活動を終える上での葛藤］も経験した。その最中，遺族は自身の活動を振り返り，＜社会活動に達成感を得る＞等【社会活動を行う遺族としての心情】に変化を感じた。また，【故人に対する心情】では，活動以外の生活にも＜自然に内在化された故人＞を感じた。さらに，上記の【社会活動を行う遺族としての心情】の変化により，遺族だけでなく個人として友人

との生活を楽しむ等【遺族の対人関係の在り方】も変容した。




注．【社会活動を行う遺族として生きる】の[対人関係の中で社会活動に対する気持ちが高められる]以降のサブカテゴリは同時に生起するため，時間経過の矢印を途中まで記した。

**Figure 3.** 故人と共に活動を行うプロセス




注，本プロセスは連続的なプロセスを質的に二分した。そのため，Figure 1 と 2 で重複するサブカテゴリに※を付した。




**Figure 4.** 故人と共に個人としての生活を取り戻すプロセス

**考察**　活動を終えることは遺族の生涯発達の危機となり得る。事件で奪われた自己コントロール感(Joseph, 2011/2013)を活動への達成感により取り戻すことは，遺族の回復に重要と考えられる。

## 第 4 章　総合考察

### 第 1 節　本研究の成果

本研究の成果は，①レジリエンスの環境要因の影響力や機能を明確にしたこと(研究 1)，②社会活動を行う遺族の個人と環境の相互作用を検討し，回復の複雑性や文脈性を加味した個人要因と環境要因の機能を明らかにしたこと(研究 2)，また③回復プロセスで生起する意味づけを検討し，社会活動を行う遺族の成長や苦悩を含めた回復の様相を具体化したこと(研究 2)の 3 点である。本研究で示されたレジリエンスモデルを Figure 5 に示す。

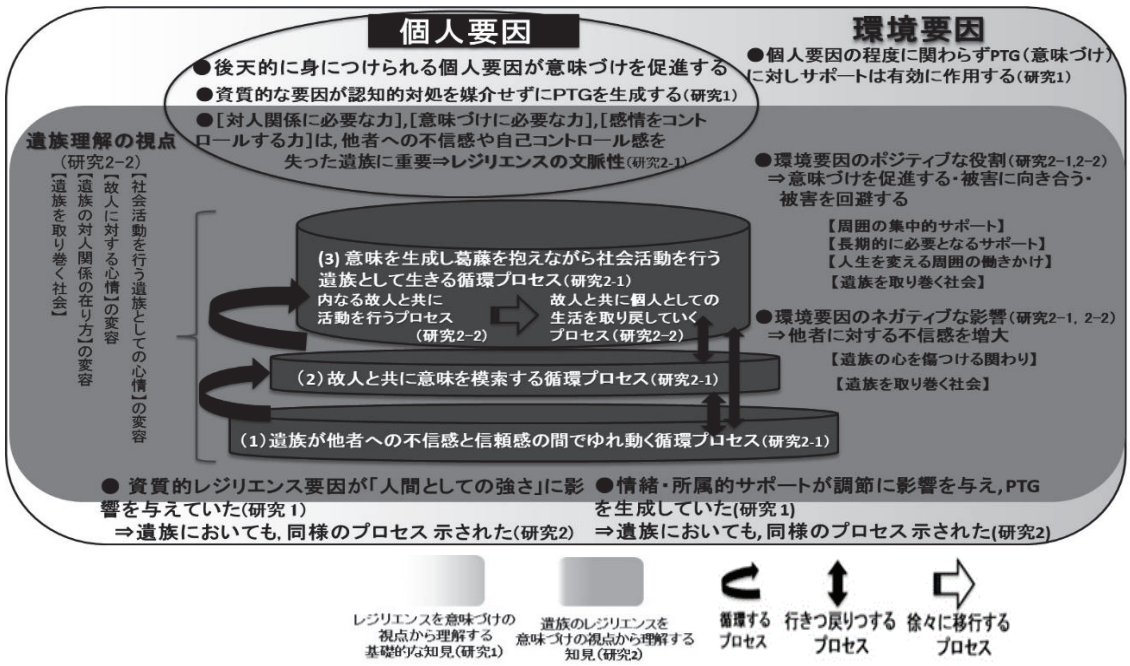



**Figure 5.** 本研究のレジリエンスモデル

## 第 2 節　本研究の限界および今後の課題

研究 1 は，結果の妥当性を高めるため縦断研究を行うと共に，PTGと精神的健康の関連や出来事の内容，経過時間の影響も踏まえた分析を行う必要がある。さらに，PTG のみならず，今後はネガティブな意味づけも同時に検討する必要がある。研究 2 は，対象者を増やし，事件の内容別に分析を行うこと，そして，活動を行っていない遺族にも調査を実施することが課題である。

## 引用文献


Asukai, N., Kato, H., Kawamura, N., Kim, Y., Yamamoto, K., Kishimoto, J., Miyake, Y., & Nishizono-Maher, A. (2002). Reliability and validity of the Japanese-language version of the Impact of Event Scale-Revised (IES-R-J): Four studies on different traumatic events. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, *190*, 175-182.

Bonanno, G. A., & Diminich, E. D. (2013). Annual research review: Positive adjustment to adversity-trajectories of minimal-impact resilience and emergent resilience. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, *54*, 378-401.

Bower, J. E., Kemeny, M. E., Taylor, S. E., & Fahey, J. L. (1998). Cognitive processing, discovery of meaning, CD4 decline, and AIDS related mortality among bereaved HIV-seropositive men. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *66*, 979-986.

Breen, J. L., & O' Connor, M. (2010). Acts of resilience: Breaking

the silence of grief following traffic crash fatalities. *Death Studies*, *34*, 30-53.

Garmezy, N. (1991). Resiliency and vulnerability to adverse developmental outcomes associated with poverty. *American Behavioral Scientist*, *34*, 416-430.

Harvey, M. R. (1996). An ecological view of psychological trauma and trauma recovery. *Journal of Traumatic Stress*, *9*, 3-23.

Herman, J. L. (1992). *Trauma and recovery*. New York: Basic Books. (ハーマン, J. L. 中井久夫 (訳) (1996). 心的外傷と回復 みすず書房)

平野真理 (2010). レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み――二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の作成――パーソナリティ研究, *19*, 94-106.

平野真理 (2012). 心理的敏感さに対するレジリエンスの緩衝効果の検討――もともとの「弱さ」を後天的に補えるか――　教育心理学研究, *60*, 343-354.

Hogan, N. S. & Schmidt, L. A. (2002). Testing the grief to personal growth model using structural equation modeling. *Death Studies*, *26*, 615-634.

堀田　亮・杉江　征 (2013a). 重大なライフイベントの意味づけに関する尺度の作成――同化・調節の観点から――　健康心理学研究, *26*, 108-118.

堀田　亮・杉江　征 (2013b). 挫折体験の意味づけが自己概念に与える影響 心理学研究, *84*, 408-418.

石原由紀子・中丸澄子 (2007). レジリエンスについて――その概

念，研究と歴史の展望――　広島文教女子大学紀要，*42*，53-81.

Joseph, S. (2011). *What dosen't kill us: The new psychology of posttraumatic growth*. New York: Basic Books. (ジョセフ，S. 北川知子(訳) (2013). トラウマ後成長と回復――心の傷を超えるための6つのステップ――　筑摩書房)

片受　靖・大貫尚子 (2014). 大学生用ソーシャルサポート尺度の作成と信頼性・妥当性の検討――評価的サポートを含む多因子構造の観点から――　立正大学心理学研究年報，*5*，37-46.

木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践――質的研究への誘い――　弘文堂

Kristensen, P., Weisæth, L., & Heir, T. (2012). Bereavement and mental health after sudden and violent losses: A review. *Psychiatry*, *75*, 76-97.

Lepore, S. J., & Revenson, T. A. (2006). Resilience and posttraumatic growth: Recovery, resistance, and reconfiguration. In L. G. Calhoun & R. G. Tedeschi (Eds.), *Handbook of posttraumatic growth: Research and practice* (pp. 24-46). Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.

Luthar, S. S., Cicchetti, D., & Becker, B. (2000). The construct of resilience: A critical evaluation and guidelines for future work. *Child Development*, *71*, 543-562.

中島聡美・白井明美・真木佐知子・石井良子・永岑光恵・辰野文理・小西聖子 (2009). 犯罪被害者遺族の精神健康とその回復に関連する因子の検討　精神神経学雑誌，*111*，423-429.

大和田摂子 (2003). 犯罪被害者遺族の心理と支援に関する研究 風間書房

Pangallo, A., Zibarras, L. D., Lewis, R., & Flaxman, P. (2015). Resilience through the lens of interactionism: A systematic review. *Psychological Assessment*, *27*, 1-20.

Park, C. L. (2010). Making sense of the meaning literature: An integrative review of meaning making and its effects on adjustment to stressful life events. *Psychological Bulletin*, *136*, 257-301.

齊藤和貴・岡安孝弘 (2011). 大学生のレジリエンスがストレスプロセスと自尊感情に及ぼす影響　健康心理学研究, *24*, 33-41.

白井明美 (2008). 日本における犯罪被害者遺族総説　武蔵野大学心理臨床センター紀要, *8*, 11-17.

Taku, K., Calhoun, L. G., Tedeschi, R. G., Gil-Rivas, V., Kilmer, R. P., & Cann, A. (2007). Examining posttraumatic growth among japanese university students. *Anxiety, Stress, & Coping*, *20*, 353-367.

Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (2004). Posttraumatic growth: Conceptual foundations and empirical evidence. *Psychological Inquiry*, *15*, 1-18.

土岐篤史(2016). 発達精神病理学とリジリアンス――マイケル・ラター――　家族療法研究, *33*, 9-15.

氏家達夫・高濱裕子 (1994). 3 人の母親――その適応過程の追跡的研究――　発達心理学研究, *5*, 123-136.

Wagnild, G. M., & Young, H. M. (1993). Development and

psychometric evaluation of the Resilience Scale. *Journal of Nursing Measurement*, *1*, 165-178.